

## 頼

りにしているスープレシピ本は、一日一つ三百六十五のレシピ集なので、一年が経過した今、一巡りして元に戻った。作って食べた後は、余白に簡単なメモを記す。日付と感想、そして◎△。長年子どもたちの通知票につけてきた記号で味を評価する。もともと嫌いなものはないし、そのとおりに作ればおいしくなるレシピを集めているのだから、◎◎が多くなるのは当然なのだが、△もわずかながらある。このレシピ本二巡目に入り、それなりに経験を積んだからには、△のままでは置くまいと思う。レシピの側に非があるとはとても思えない。

ぼくの教員としてのスタートは、江の川沿いの小さな町だった。あてがわれた住宅は、ほとんど学生の下宿屋同然で、新規採用の男ばかり四人で暮らした。乗しかつたのだが、学生気分が抜けるのにそれだけ手間取ったかもしれない。隣室のTさんは、画家でもあった。二人で飲みながらモチーフの話などよくした。描いているところはついぞ見なかったが、何年か前に新聞で個展が大きく取り上げられていたから、ずっと描き続けていたのだと懐かしくなった。酒のあてなど何でもいよいよと違い、Tさんは一時間かけるのが常だった。缶詰のオイルサーディンもTさんによって初めて知った。缶切りで蓋を中途まで開き、そのまま

オーブントースターに入れて焼く。プツプツと黄金色の泡を立てる缶詰に箸を突っ込んで熱々のイワシをハーフ言いながら食した。うまかった。関係ない気もしつつ、やっぱり美術家は違う、と思った。

スープレシピに缶詰のオイルサーディンを見つけたとき、四十年前の焼きたての味と香りがよみがえった。あれ以降、一度も買っても食べもしていない。スープはトマトベースで、オイルサーディンで出汁と油を兼用している。期待を膨らませて面白い物をして、台所に立った。なのに、ぼくはレシピの余白に△を記した。イワシの生臭さが口中に残って、うまいと思えなかったのだ。一年が経ち、オイルサーディンの値打ちを下げたままではTさんとの記憶にもケチを付けているようで落ち着かず、再挑戦することにした。△とともに記したいいくつかの反省を反映させた。一つは、前回入手できずに見送ったハーブ、実家の裏庭から植えたばかりで摘み取られたローズマリーの使用。もう一つ、缶詰オイルサーディンは最安をもつてよしとせず国産にし、油量を控えることにした。結果、ハーブが見事な働きをし、前回辟易した生臭さが消えた。ぼくは無事◎を書き入れた。あのころTさんが語っていたモチーフは「結」だ。オイルサーディンに結びついた記憶とスープでしばらくぬくもった。

2022.5.16

夕焼け通信 1352号



〒690-0823 島根県松江市西川津町4276-B402 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

専業ババ奮闘記 (その2) 98

## 木幡智恵美

整理 (5)

四十九日の法要は、我が家の三人、義姉、姪二人とその子どもだけで行った。畳の表替えが何とか間に合い、青畳の香りの中でご住職が読経をされる。お経を聞きながら、我が家や親戚の法事では主だつて段取りをし、このご住職ともあれこれ打ち合わせていた義母が、拜まれる側になつてしまつたのだなあとしみじみ思う。

読経の後は墓へ行き、納骨。ところが、骨壺を収めるため石を退けようとした夫が、「あつ、腰が」と呻く。結局息子と私とで動かした。「おばちゃん、男前」と姪っこの声が飛ぶ。

法事の後のお浄めの食事は、義母の白寿の祝いをした料亭で行う。その時の話もしながら、義母にまつわるそれぞれの思いをゆつたり語り合った。

家に帰って、祭壇を片付ける。これで、朝晩は元通りの仏壇で線香をあげることになる。翌日、宗矢の熱も下がり、娘たち母子がやって来た。まずは仏間に進み、皆で線香をあげる。宗矢はおりんを叩く役。しつこく叩き続けるので、お母さんに叱られていた。

宗矢はほぼ回復し元氣そうだ。部屋で少し遊んでから散歩に出かけた。昼食を摂り、昼寝をした後、娘の保育所時代からの友人が、香典を持って訪ねて来てくれた。うちに遊びに来ることも結構あり、義母のこともよく知っている。着付けをしていると聞いていたので、義母の筆筒にあつた、使っていない帯締めなどを持って帰つてもらつた。

娘は、先日衣装ケースなど大物を持って帰つたが、今日もあれこれ物色している。と、動きが止まつた。見ると、泣いているではないか。「これ、持って帰つていい」と目頭を押さえながら言う。手にしているのは、一枚の封筒だ。そこには、舅や姑が亡くなった年、二男、夫、三男を亡くした年と、それぞれ亡くなった歳が書かれていた。「子ども二人も亡くしたんだね」という娘の頬を涙がつた。義母と娘は、申年と戌年のせいかな、よく言い合いをしてきた。娘は黙つていることが出来ない性格で、義母も言い返さずにいられない質だ。周りで、「また、犬と猿がやつてる」とよく言つたものだ。その娘も三人の子の母になつた今、義母がどんな思いで生きて来たか感じることができるようになつたのだらう。封筒は折ってポケットに入れ、枕などを車に積み、三人の子どもたちと帰つていった。

30代フリーター やあ、ジイさん。憲法記念日前の朝日新聞の世論調査では、憲法9条の改正反対が賛成を上回る一方で、緊急事態条項を設けることには賛成のほうが多かった。

年金生活者 調査結果は、国民のあいだに「平和主義」は根づいていても、「立憲主義」すなわち国家権力を縛るのが憲法だという考え方は根づいていないことを示しているように見える。それでも日本国憲法はこれまで、十分とは言えないまでも国家権力を縛る機能を果たしてきた。それは9条があったからだ。

「立憲主義」の立場を日本国民の多くは取らないが、9条の非戦・非武装は国家に対する究極の縛りを意味し、それを堅持することで間接的に「立憲主義」の立場を取つていると言える。

憲法は各条項がつながってひとつの体系をなしているのです、9条の縛りの強さが他の条項にもおよび、国民がそれと意識しない「立憲主義」が実現していると考えることができると。

果は示している。

ロシアが「悪貨」を使っているのに、日本だけが「良貨」を使えば大損害をこうむる。いつ先制攻撃を仕掛けてくるかわからない相手に「専守防衛」で臨んでいたら、向こうにほしいままに侵略される。だったら、相手から攻撃されるまで待つのではなく、攻撃されていなくてもその恐れが生じたら自衛力を行使すべきではないか。日本国民の中にあるそんな懸念がJNNの調査結果にあらわれていることは確かだろう。

ウクライナにはロシアを先制攻撃する意図などなく、事実としては「専守防衛」状態にあった。現にウクライナ軍はロシアに攻撃されて初めて反撃した。そのぶん犠牲が大きくなった。もつと早い段階でロシア軍をたたいていけば、犠牲を縮小できたのではないか。だから、日本も「専守防衛」を見直すべきだ。そういう見方は成り立つし、JNNの調査はそれを反映していると言える。

30代 橋下徹がウクライナをめぐる木村草太との対談で「戦争中こそ憲法の考え方がものすごく重要だと痛切に感じた」と語っている（ABEMA TIME S、4月30日）

年金 権力の行使に制限をかけるのが憲法なのに、有事になるとそれを緩める方向に政治が動きやすいことを警戒する立憲主義的な考え方が表明されている。

30代 橋下は次のようにも言っている。「ウクライナは政治の判断として、18〜60歳まで男性について国外退避を禁止することになった。家族と一緒にに国外に逃げたい、だけど国に「残ってくれ」と言われているから逃げられない、と。（中略）今の日本で考えれば、「逃げる自由」を認めないのは絶対に許されないこと」

年金 有事をめぐるこれまでの常識とは異なる考えが表明されている。戦争になれば国民の権利を制限するのは当たり前というのが現在の世界の常識であり、自民党が憲法に緊急事態条項を

30代 ところが、朝日新聞の世論調査では、逆に「専守防衛」を「今後も維持するべきだ」が68%にのぼっている。

年金 ロシアのような国が相手だと、「専守防衛」をやめるとかえって攻撃を誘発する可能性が高まる。もし日本が「専守防衛」を放棄すれば、日本に先制攻撃されるかもしれないと疑心暗

設けるように主張しているのもそうした「常識」に沿ったものだ。橋下は「逃げる自由」を認めよという言い方でその「常識」を批判している。

この主張は国家の大義よりも人の命の尊重を優先する考えだ。こんな主張が左派でもリベラル派でもない、れっきとした保守派の元政治家から出てくるところに、「熱い戦争」が「本流」から「傍流」に移った世界の現在が示されている。

30代 JNNの世論調査では、憲法9条にもとづく防衛の基本方針である「専守防衛」を「見直すべき」とする回答が52%と半分を超えている（5月9日TBS NEWS DIG）。ロシアのウクライナ侵略が影響していることをうかがわせる結果だ。

年金 JNNの調査結果は「悪貨は良貨を駆逐する」というグレシャムの法則を思い起こさせる。ロシアの侵略戦争を「悪貨」に、日本の「専守防衛」を「良貨」にたとえれば、この「良貨」が駆逐される恐れがあることを調査結

鬼になる国が一部にせよ出てくる可能性がある。とりわけ自らが先制攻撃をいとわないロシアのような国は、相手も同じようにするかもしれないという考えに陥りやすい。相手が先制攻撃する前にこつちが攻撃しなければやられてしまうと考えだすかもしれない。

ウクライナのNATO加盟はロシアにとつて脅威だから、それを阻止するためとして始めた「特別軍事作戦」はそうした考えから導き出されたものだ。加盟に動いてもいないときに武力行使に踏み切るくらいだから、もしウクライナが先制攻撃の選択肢を捨てない意思を少しでも示していたら、ロシアはもつと早く攻め入っていただろう。

それらを考えると、「専守防衛」の放棄は日本にとって危険だということがわかる。「専守防衛」維持派が多数になった朝日新聞の世論調査は国民の中にそうした懸念が強いことを示している。「悪貨が良貨を駆逐する」のを助けるようなことをしてはならない。

ニュース日記 830  
中村 礼治

## 日本人の立憲主義